



理想の彼は イミテーション

たなかひまわり

私の彼、真野廉太郎。小学校の先生をしている。

真野君の周りには、いつも女友達がいっぱい。学生時代の同級生や後輩、先輩。生徒の親とも交流がある。なぜか綺麗な人ばかり。

真野君は、一度知り合うと縁を大事にする。彼の交友関係は広がる一方だ。

彼女達にはそれぞれ彼氏や旦那さんがいる。仲が悪いのならともかく、いつもはちゃんとパートナーと行動している。二人で一つ、みたいな理想的なカップル。それなのに、何かあると真野君を頼る。ずるい。

真野君はとにかく面白い。話し上手。趣味に関しては多いだけじゃなくて、一つ一つ深く掘り下げる。のめり込み方が半端じゃないから、専門的に詳しい。聞けば何でも答えてくれる。

場を盛り上げるのも上手いから、飲みの誘いは日常的。友達からのメールや電話が絶えない。真野君は人に頼られると断らないので、いつも誰かと会っている。

女の子達が遊びに誘ってくる時は、もちろん友達モード。真野君がそれ以上の空気にさせないらしい。女友達に、「だから安心できる」って言われたこともあるみたい。

でも、中には恋愛をちらつかせてくる女の子もいる。彼は気づいてないみたいだけど。隙あらばどうにかしようとする狙っている雰囲気。私は彼からの報告で、彼女達の怪しい匂いを嗅ぎつけることしばしば。女の勘。

それを指摘すると、「俺だってわかるよ」と言う。負けず嫌い。俺様気質。まあ、危うい状況になると、するりと交わしているみたいだけど。だから大丈夫か。淡泊だし。女を見る目はあるって言ってるし。

だけどやっぱり、私としては不安でいっぱい。恋人じゃない異性と二人きりで会うなんて、私の中の常識にはない。真野君にはある。常識の範囲内。話をするのが楽しいだけ。共通の趣味を持っているだけ。悪気は全くない。

それだけのことなのに、どうして理解できないのって真野君は言う。嫉妬しないでって言う。そんなこと言われても、心穏やかではられない。

真野君みたいな人がもう一人いたらいいのに。私は、そんなことを考えた。

真野君っていうパートナーがいて、更に真野君みたいに皆の世話を焼くような人が別にいたら、私はその人に頼れるのに。真野君が他の人と会っている間、別の真野君と楽しんでいただけるのに。

でも、なかなかいないから真野君が重宝されるんだ。いや、そもそも私は彼氏以外の男の人と遊んだりなんて出来ない。不公平な世の中だ。

あまりにも放っておかれる日が続いたある日、私の不満が爆発した。

「真野君の周りにいる女の子達が羨ましい。私も彼氏じゃない真野君が欲しい」
思わず、考えていたことを口にしてしまった。本心じゃない。真野君にもう少し構ってほしいだけだった。

真野君は、「何それ」と一言。呆れたみたい。

「他の男と付き合いたってことか」

完全に誤解している。

「そうじゃなくて……」

言い訳しようとしたけど遅かった。

「なんとかして時間作ってるつもりだったけど、そういうこと言うんだ。なんか疲れた」

そう言い残して、真野君は私の前から消えた。

私は思い切り落ち込んだ。あんなこと言わなきゃ良かった。後悔。でも、先に立たず。メールも電話も無視される。

布団にうずくまる。体が鉛みたいに重い。無理やり仕事に出かける。ミス連発。怒鳴られっ放し。身も心もボロボロ。彼に嫌われたくらいで。

嫌われたくらい？ 重大事件だよ。でも、こんなことくらいで死にはしない。死なないけど死にそう。

すごく弱い自分。情けないと思いつつ、立ち直れない。明日は休もう。無理。そう思った夜のこと。

ドアをノックする音がした。開けてみると、真野君が立っていた。あれだけ怒ってたのに、連絡もなく来るなんて不思議。しかも、照れながら笑っている。

「ごめん、俺が悪かった」

開口一番、そう言った。

「来てくれたんだ……」

私は嬉しさに胸がいっぱいになった。ホッとして少し泣く。そんな私を真野君はギュッと抱き締めた。しかも、その日から毎日、真野君は私の部屋に来るようになった。

決まって午後7時。真野君は私が帰宅するのを玄関の前で待っている。

突如として始まった同棲生活。

一緒にキッチンに立って料理を作る。食事中は、一日の出来事をお喋り。テレビを見ている時は、隣に座ってぴったりと体を寄せる。その間、ずっと手を握っている。しかも、彼から。寝る時は腕枕。朝起きるまで同じ体勢。

なぜか体は求めてこない。私はエッチしないでくっついて寝るのが好きだから丁度いいけど。時々は……と思う。

「真野君……」

甘えた声でキスしてみる。真野君は私の髪を撫でるだけ。手を出してこない。それ以上、私から誘うのは気が引ける。いつも誘ったことないし。恥ずかしいし。

朝になると部屋を出ていく。ここから直接、学校に出勤しているみたい。

昼休みは必ずメールをくれるようになった。用事があるわけでもないのに。

私がメールすると、すぐに返信をくれる。私が終わらせない限り返信が続く。いつも一往復か

二往復止まりだったのに。報告メールだったら一方通行ってこともあったのに。

もういいよって言うくらいメールをくれる。ずっと抱えていた「返信が来ない不安」がいっさいなくなった。

「どうして？」

真野君に聞いてみた。

「こういうの、嫌？」

逆に聞かれる。彼の返事はそれだけ。

嫌なわけがない。

きっと、真野君に心境の変化があったんだ。私が寂しがってたことに気づいたんだ。そう思うことにした。

そうして三か月。真野君は相変わらず尽くしてくれる。

幸せで満たされている……はずなのに、いつしか物足りなさを感じるようになっていた。ちやほやされるのが当たり前になり、わがママが抑えられない。

メールの返信がすぐに来ないことに腹を立てる。

帰宅時に待っていないことを咎める。

私よりも早く寝息を立てた彼を起こす。

心はもっと暴走する。

私を不安にさせないで。私を一人ぼっちにしないで。私だけを見て！

彼を振り回す、自分勝手な女になっていた。

ただ、以前の私が完全にいなくなったわけではなかった。わがママを繰り返すたび、自分が自分に嫌な奴という烙印を押す。

それなのに、優しくされればされるほど、もっと、もっとと要求してしまう。条件反射。一度知ったぬるま湯から抜け出る恐怖。自分の首を絞めている。

私は真野君に会うのが苦しくなっていた。

今日もやってきた真野君は、真っ赤な顔をしていた。

「熱があるんだ。三九度」

フラフラしつつも笑顔を作る。苦しそうに肩で息をしながら。

「そんな……今日は、行けないって言えばいいのに……」

私は急いで布団を敷き、真野君を寝かせた。風邪薬を飲ませ、氷水で絞ったタオルで頭を冷やす。

横になった真野君は、すぐに眠りに落ちた。そんな彼のことが、徐々にぼやけて見えなくなる。

「もういいよ……ごめん……もう、わがママ言わないから」

涙が私の頬を伝い、真野君の瞼に零れ落ちる。

真野君はすっと目を開け、私を見つめた。そして、そのまま動かなくなった。

「真野君？ 真野君！」

死んでしまったのかと思った。それにしても、呼吸が止まる瞬間が穏やか過ぎる。全く苦しまなかった。

私は混乱して、何も行動を起こせない。

数分後、玄関のチャイムが鳴った。私が出る間もなく、扉が開き、誰かが入ってきた。

「え？　なんで？」

私は茫然とした。

「俺じゃない俺はどうだった？」

真野君だ。

「どういうこと？　この人は……え？　あなた、誰？」

「俺が本当の真野。こいつは俺の影武者。俺と同じ能力と記憶を共有してる」

訳が分からない。

「時々、俺の代わりに仕事させてんだ。ここだけの話、女の子と出掛けさせたりもしてる」

私は、女の子というワードに反応する。

「真野君、みんなに付き合っただけじゃないの？」

「うん、さすがに体がもたないよ。夜中の呼び出しは全部こいつ。安心した？」

夜中には女の子と過ごしてないんだ……。

そう安堵しかけ、私は我に返った。

「っていうか、ちょっと待って。この真野君は何者？　双子？　動かなくなっちゃったの。ねえ、死んじゃったのかな。どうしよう」

「落ち着け。死んだのでも双子でもないよ。精巧に出来てんだろ」

混乱している私とは反対に、真野君は悔しいほど冷静さを保つ。

「じゃあ何？　ロボット？」

精巧に出来ているといえどロボットだろう。

「ロボットじゃ飲み食いしないだろー」

「そか。えっと、そしたら……クローン？」

動物のクローンは実現しているのだから、人間だって倫理的な問題をクリアすればあり得るはず

。

「クローンなら厳密に言えば人間だよな。でも、こいつは人間じゃないんだ」

真野君は即座に否定する。

「それに、クローンじゃ俺の思い通りにはプログラミング出来ないな」

「プログラミングって？」

また、ややこしい単語が出てきた。

「おまえ主体の行動の徹底。だけど、エッチだけはしないようにしといた」

「なんで？」

偽の真野君と毎日過ごしてきて、私が不思議に思っていたことだ。

「えー、だって嫌じゃん」

真野君から予想外の答えが返ってきた。

私は少しにやける。真野君は普段、ヤキモチを焼くようなことがほとんどない。

「あと、おまえが俺そのものを受け入れてくれたら、動かなくなるようにセットしといた」

「真野君そのもの？」

「おまえにとってはあまり好ましくない俺。まあ、悪いことしてるつもりはないけどな」

私にとって好ましくないと思うのは.....。

思い返そうとして、頭の中で映像になる前に止めた。

「で、動かなくなるとこっちのアラームが鳴る仕組み」

「だから、すぐに来たんだ。真野君」

「アラームが鳴った時は嬉しかったよ」

真野君は満足そうに笑う。

「そうだったんだ」

私もつられて笑う。だが、事態を理解できたわけではないので半笑いだ。

少しの沈黙。真野君が動かない真野君に視線を向け、何か思い詰めた表情をした。

「こいつ、ホントに手、出さなかったよな？」

「ん？」

「エッチ。求めなかったよな？」

真野君が真顔で訊く。それについては、やはり気になるのか。

「うん。……でも、私がせがんだらどうなったの？」

私はちょっと踏み込んで質問してみた。

「うまく拒む。おまえを傷つけないように。こいつは完璧だから」

「えー、拒まれたら、どういう態度だろうと傷つくと思うけど」

「そうか？ 要研究だな。女の子を傷つけちゃ、俺の影武者として失格だから」

真野君は、どこまでも自信家だ。

「とにかく、おまえは男に頼らない方が自分らしくいられるんだよ。誰かに寄り掛かろうとすると、本来しなくていいことだから歪みができる。自分で考えて行動できるだろ？」

真野君が私のことをそう見ているんだと初めて知る。

「うーん、どうだろ」

「行動できない子はできないから」

「そうなの？」

「俺の周りの女の子達に比べると、ちゃんと自分で決めて動く方だよ」

「あんまり意識してないけど」

「そうだろうな。だからおまえと付き合ってるんだよ。他の誰でもない。パートナーはおまえ」

真野君は私の頭をポンポンと叩いた。パートナーという響きが私をくすぐる。

「でも、あまりに頼らないと可愛くなくない？」

「そんなことはないよ。俺といる時すっげー楽しそうだし、会いたって言ってくれるし」

「それでいいんだ？」

「それがいいんだよ。俺はおまえにこうして欲しいっていうの、ないよ」

「なんか、期待されてないみたい」

「そうじゃなくて。いいところも悪いところも全部ひっくるめて好きってことだよ」

真野君は、もうずっと長い間、私そのものを受け入れてくれていた。

私はそれに、ずっと長い間、気づかずにいた。

「わがままって言い始めるとキリないだろ」

「うん、キリなかった。辛かった」

「欲は人に対してぶつけると自分に返ってきちゃうからな」

「思い通りにいかないことに拘っちゃって、前に進めないの」

「俺も学生の頃はわかんなくて、自分が苦しいのは周りのせいだって思ってたよ」

「真野君もそんな時があったんだ」

「そうだよ。教師になって子ども達と向かい合うことで鍛えられた」

子どもには大人のエゴは通用しないと、真野君は付け足した。

「欲が悪ってわけじゃなくて、向上心として自分に向ければいいんだよな。相手にヤキモキして
るより、自分を高めることに一生懸命になってた方が有意義だと思わない？」

「同じ時間を使うなら、その方がいいね」

「そうやって、お互い自立してるからこそ」

「会った時に楽しめる」

「俺達は、そういう関係でいたいな」

「だね」

雨降って、地がようやく固まる。経験しないとわからない私への、真野君の個人授業が終わった

。

もう、他の女の子に頼られてる真野君を見ても僻むことはない。

私は自分で考えて決められる。誰かを頼らなくても自分で動ける。もう一人の真野君は必要ない。
たまに会える真野君本人だけで十分。

それに、真野君の気持ちは私にある。いや、あってもなくても私が真野君を好きでいればいいこ
とだ。

きゅっと締め付けられていた胃がやっとなんか緩む。そこで私は改めて訊いた。

「……で、結局なんなの？ この真野君」

「え？ あー……内緒！」

完

理想の彼はイミテーション

<http://p.booklog.jp/book/91162>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91162>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91162>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ